

『黒豹王とツガイの蜜月～ハーレムの花嫁～』

著：華藤えれな

ill：黒田 屑

「……っ。どうなってるんだ、この街は……」

何度も同じところをまわっている。

泉の前に出ると志優は再び立ち止まって、上空を見あげた。

月の表面までもが光彩のむこうに透けて見えそうなほど眩く、それでいて妖しい光が志優の顔にうっすらと降りかかる。

見れば焦りと不安をにじませた志優の姿が、水面に映っていた。

さらりとした癖のない髪、抜けそうなほど白い肌、和風の人形めいた風貌。

いつも年齢よりもずっと幼く見られ、大学生くらいに思われてしまうが、これでも間もなく三十になる救命救急医である。

以前は日本の大学病院に勤務していたが、今では国際緊急医療援助のNGOに所属し、北アフリカの最前線の現場で医療活動に従事している。

いや、従事していた。ここに連れてこられるまでは。

『どうした、志優、もう弱音を吐いているのか、おまえらしくもない』

ふっと男の声が耳の奥でよみがえってくる気がした。

『一度だけ、チャンスをやってもいい。決して俺に媚びようとしないうその自尊心に敬意を示して。これは俺とおまえの闘い、いや、ゲームだ』

骨に響くような低い声。

艶やかで妖艶な微笑に、背筋がぞくりと痺れそうになってしまった。

そのときのことを思い出しただけでざわざわと皮膚が騒ぎ始め、身体の芯に熱が灯りそうになる。

あの男から与えられた、甘く妖しい快樂がよみがえってきたせいだ。

この皮膚から香り立つ妖しい睡蓮と薔薇が入り混じったような香油の匂い。あの男から与えられた快樂の時間、そして己の嬌態を否応なく想起させてしまうから。

「忘れなければ。早くここから出て……ここでのすべてを」

アラビアンナイトの世界のような異世界で起きたことのすべてを。この終わりのない旅のような異空間での日々を。

志優はあたりを見まわした。

アラバスク模様のタイルが埋め込まれた壁、幾何学模様が描かれた木製の扉も、流れるような装飾書体が刻まれた窓。

曲がりくねった路地が別の路地と交差し、気がつけば袋小路へと迷い込んでしまう。焦れば焦るほど、仄冥い迷宮の深みにはまってしまおうかのような不安に襲われる。

月の位置を確かめたくても、どこから見ても同じようにしか見えない。

その昔、侵入してきた敵を惑わし、追い詰めるために造られたらしいが、志優のように慣れない者が

入りこんでしまうと、まさに方向感覚が惑乱され、出口を見つけられなくなってしまう。

「……っ」

似ている……と思った。

これまでの日々と。これまでのこの国での。

あの男を前にすると、こんなふうに方向感覚を失ってしまう。進もうと思っていた場所への道がどこにあるのかわからなくなりそうなほど。

こんな関係は受け入れられない、歪んでいる、理解できない。

そう思うのに、皮膚に受ける熱っぽい感覚、身体の内側を灼くものに呑み込まれ、自分という人間がどの方向に向かって生きていたかさえわからなくなってしまいそうになるのだ。

そう、迷路に入りこんだように、あの男——アシュとの日々は、志優にとって心の迷宮を彷徨っているような毎日だった。

(早く抜けださなければ。この迷路から)

この街からも、あの男の呪縛からも。

この逃亡劇をふたりのゲームだと言った男。

人間でありながら、黒豹の化身でもあるこの国の王。

「そうだ、彼から解き放たれなければ」

——いかなるときも平静な心を持って。

心の中で自分に言い聞かせる。その昔、亡き父が遺した本の中にあった言葉だ。父が尊敬していた近代臨床医学の先駆者と言われる医師の言葉である。海外で医療活動をするようになって一年、志優は常にその言葉を頭の片隅に入れるようにしていた。

己のなかで強く決意を固めたあと、志優は冷静に月の位置を確認し直した。

そして一歩、前に踏みだそうとしたそのとき、ふいに路地の奥——漆黒の闇の奥から、なにか得たいの知れないものの存在を感じた。肌に突き刺さるような視線とともに。

獣、なにかがいる。殺気のような気配と、異様なほどのぴりぴりとした緊張感。

「……っ！」

その次の瞬間、志優は息を呑んだ。異様な獣の気配と同時に、暗闇のなかに光る夥しいほどの光に気づいたからだ。

志優は思わず後ずさりかけた。しかし背後にも同じような気配を感じ、足を止める。

あれは……。

目だ、闇に光る金色の双眸。それらの眸の主はネコ科の大型の肉食獣だった。数十頭、いや、百頭はいる巨大な豹がいつのまにかぐるりと志優をとり囲んでいた。

ウツツという頭上からの唸り声にハツとして見あげると、周りの建物の屋根やバルコニーにも豹たちの姿があった。

青白い月の光が、彼らの体軀を彩っている豹紋をくっきりと照らしだしていく。

豹の大群だった。その一番奥に、ひときわ異彩を放ったかのように、美しくしなやかで大柄な体軀の豹のシルエットが浮かびあがって見えた。

「……っ」

いや、シルエットではない。

一頭だけ、黒一色に包まれたブラックレオパード——黒豹が彼らの中央に佇んでいるのだ。

そのとき、はっきりと悟った。

負けた——。

ゲーム終了。負けたのだ。

ここから一步も動けない。自分は街から出られなかったのだ。

足音もなく優雅に黒豹が近づいてくる。他の豹たちが移動し、黒豹の前に道ができていく。

「……志優」

黒豹は志優の前までくると、すうっと一人の男に姿を変えた。

「……っ！」

艶やかな癖のない黒髪、鋭利な黒い眸、端麗に整った風貌、そして浅黒い肌、しなやかでたくましい均整のとれた長身にまとった上質な純白のアラブ服。

若々しいみずみずしさと同時に、気品と優雅さを全身に漂わせた男は、志優と視線を絡ませたあと、口元に不遜な笑みを浮かべ、腰から剣を抜いた。

「ゲームは終わった。諦めるんだな」

男は切っ先を志優の首元に突きつけてきた。

「——っ」

ちりっと首の皮膚に走るかすかな痛み。優美なカーブを描いた半月刀の刃に、青い月の光がきらりと反射していた。

彼があと少し力を加えると、志優の静脈は切れてしまうだろう。それでも屈したくはなかった。

「……い、いやです……諦めるなんて……」

「だめだ」

「どうしてぼくなんかを……。ぼくなど……一介の医師です。それなのに……国王たるお方が」

「そう、だからこれは復讐だ」

「……っ」

男は志優を射すくめるように鋭い眼差しで睨みつけてきた。濃艶な男らしさのなかに、秘めたる獣性をにじませた獣の王としての目だった。

逆らうものは許さない。そんな圧倒的な威圧感に怯みたくはなかったが、志優はその場に縫い止められたように動けなかった。

「俺を捨てたではないか、母親のように慕っていたのに」

「あれには事情が」

かつて、まだ彼が幼かったころ、確かに母親のように世話をしたが。

「いい。言いわけなど聞きたくない。母親でも何でもない。今のおまえは俺の愛妾だ。ハーレムのオンナとして俺に奉仕して生きていけ」

剣を下ろし、男は一步前に近づいてきた。

そして志優の肩を掴んで、路地の壁に押しつけてきた。

ふっと彼から、濃密な薔薇の香りがしてきた。たゆたってくるその甘やかな芳香に、身体の奥で熾火

のようにくすぶっていた火が再燃しそうになってくる。

「王……」

気がつけば、あたりにさっきまでいたはずの豹がいない。

青白い月の光を受けた路地は、シンと鎮まりかえり、志優と彼以外、生きているものの姿はなかった。

近くに泉があるのだろうか。シンとした暗い袋小路の奥からさらさらと水が流れていく音がするだけの、ひっそりとした夜の裏路地。そこに二人だけ。

「志優……どこにも行くな。おまえが欲しい、必要なんだ。助けてくれ」

周囲の静けさに比例するように眸から殺気を消すと、男は今度はさすがのような眼差しを志優にむけてきた。

(わからない、この男が)

志優は息を震わせた。

これは復讐だ、ハーレムの花嫁にして、奴隷のように支配する。そう言いながら、一方で、必要だ、欲しい、助けてくれと言う。だからわからない。

「……どれが……どれが本物のあなた……なんですか」

かすれた声で問いかける。眉をひそめ、男は志優の顎を掴むと、くちづけをするときのように顔を近づけてきた。

「本物の俺……とは？」

目をすがめ、息が触れあいそうな距離で問いかけてくる。

「復讐だ、ハーレムの奴隷にするといいながら……欲しい、助けてくれ……と言う。そのどちらが……あなたの……本心なのか」

「知ってどうする」

「……え……」

「知れば……なにか変わるのか」

「それは……」

「変わらないなら、知る必要などない。……実際のところ、俺ですらよくわかっていないのだから。おまえへの、この執着の意味が」

黒い影が顔にかかり、唇が近づいてくる。

「ん……っ……っ」

舌先で唇をこじ開けられると、彼から揺らぎでる薔薇の匂いが麻薬のように唇のすきまから口内に忍びこんでくる。

この行為の意味。この心の迷いの原因。彼ですらわかっていないことの答え。果たして、それを知ることができるのか。けれど知らなければ、前に進めない。

「ん……っ……っ」

危険な挑発と甘美な誘惑とが混ざりあった本物の迷宮。

その深淵に彷徨いこんでいくような感覚に囚われながら、いつしか志優は男の腕に抱きこまれていた。

それからどのくらい経ったのか。

気がつけば、志優は男の腕に抱かれていた。

場所は彼のハーレムでも、彼の宮殿のどこかでもなく、迷宮都市の奥に、ひしめき合うように建っている場末の安宿だった。

娼婦や男娼たちが旅人に声をかけて連れこむときに利用するような、それ専用とっていいような安宿の、漆喰が剥がれて壁の骨組みが剥き出しになったような狭い部屋の中。

ギシギシとベッドが揺れるたび、真鍮のベッドの脚が石造りの床を傷つけていく。

上空で煌めいていた月はいつしか西の砂漠の果てに消え、迷宮都市の街は容赦なく真昼の太陽に灼かれていた。

裏路地は、暗闇にも等しい濃い影に包まれている。

北アフリカの光と影が最も強くあらわれる時間だった。

それでも昨夜と違うのは、ざわざわとした人々の生活音が耳に聞こえてくることだ。

路上に店を広げている骨董屋や銅や陶器の食器を売っている行商人の活気に満ちた声。

或いは荷物を乗せた口バがカツカツと歩いていく音、そして路地を走り抜けていく子供たちの賑やかな声……といったものが、壁の向こうからがやがやと響いてくるのだ。

そんな街の一角に建つ、古めかしい連れこみ宿。

建物の一番奥にある、あかりの届きにくい部屋の片隅のベッドで、もう何時間、こんなことをしているのか。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>